東京逓信病院ニュース
vol. 128
けんこう家族

〒102-8798
東京都千代田区富士見2-14-23
TEL 03（5214）7111㈹
http://www.hospital.japanpost.jp/tokyo/

発行／東京逓信病院　2018年4月1日

開院八十周年を迎えて

東京逓信病院長
平田　恭信

東京逓信病院は本年2月で開院八十周年を迎えました。今回のけんこう家族はそれを記念しまして、節目の年にあたり病院の状況と各診療科の今後の抱負などを特集いたします。

当院は当時の逓信省の職員ならびにその家族のための病院として昭和13年に開設されました。戦争の足音が近づいていた時期で、国に資金があったとは思われず、実際、篤志家からの寄付と職員ならびにその家族からの浄財によって建設が進められました。最初の建物は現在の診療棟の位置にあり、白亜の殿堂と呼ばれ、観光バスのコースに入るようなものだったそうです。長らく逓信省、その後、郵政省職員のためだけの病院施設でしたが、昭和61年に一般にも開放しまして、職域病院としてだけでなく、地域の中核病院としての役割を担うようになりました。

そのような背景がありますので、当院は民営化されたと言いましても、現在は移行期にあり自治体病院のような公的病院の性格を色濃く持っております。そのため多くの診療科を構え、たいていの疾患には対応できます反面、もっと効率的な運用をと考えましても、各種の規制により患者さんからのご要望通りに進めないもどかしさもあります。しかしいずれにしましても毎年開院記念日には先輩方のあの困難な時代に於ける大事業の達成を思い出し、あらためて私どもも患者さんに信頼されます安心でレベルの高い診療を提供できますよう努力することを誓っている次第です。

現在の診療棟は三代目で建設当時はさぞ立派であったと自画自賛しておりますが、すでに竣工より30年を越えておりますので、あちこちに不具合が見られます。その対策の一環としまして今年より診療棟の改修を始めました。3月からはそれが病棟に及び、この11月まで一部の病棟を順番に閉鎖せざるを得なくなりました。当院をご利用していただきます患者さんには大変ご迷惑をおかけしますが、なにとぞ事情ご拝察の上、ご理解賜れば嬉しく存じます。効率的な診療を心がけ入院制限を最低限に保ちたいと思います。今冬は例年にないインフルエンザの大流行がありました。シーズン初期よりA型ばかりでなくB型も流行り、また症状が比較的少ない患者さんが多く、そのことがかえってインフルエンザの蔓延の一因になったかと推測しています。それらがやっと終息して我々も余裕を持って新たな疾患に立ち向かいたいと願っております。

皆様におかれましては体調に気を付けられ、ご心配なことがあれば早め早めにご相談いただけますようお願い致します。

主任医長
勝田（かつた）　秀紀（ひでのり）

内分泌代謝内科

当科は、糖尿病（1型、2型）、高コレステロール血症（家族性を含む）、骨粗鬆症などの代謝疾患および下垂体、甲状腺、副甲状腺、副腎、性腺、（内分泌性）高血圧症などの内分泌疾患を診療しています。また、これらの疾患が併存する（高度）肥満症、睡眠時無呼吸症候群の診療も得意としています。糖尿病専門医や肥満症専門医、糖尿病療養指導士資格をもった看護師、薬剤師、管理栄養士、臨床検査技師など各専門スタッフによる糖尿病専門外来（栄養相談、療養指導、フットケア）、メタボ・肥満外来、教育入院、（高度）肥満症減量入院プログラムなどが充実し、糖尿病特有の合併症だけでなく、心筋梗塞・狭心症・脳梗塞や足壊疽などの発症予防を踏まえた包括的な疾患管理に努めています。内分泌疾患は内分泌専門医を中心に、病態に即した各種ホルモン機能検査や画像検査を駆使した的確な臨床的診断を行ない、個々の病態に応じて診療を進めています。外科的な治療が必要な際は、脳神経外科、甲状腺外科、耳鼻咽喉科、泌尿器科と密に連携をとり、特殊な治療が必要な場合は、大学病院その他の専門医療機関と連携して総合的な治療実績を上げています。

主任医長
飯山（いいやま）　光子（みつこ）

血 液 内 科

血液内科は　白血球、赤血球、血小板の異常やリンパ節の病気をみる科です。白血病やリンパ腫といった悪性腫瘍や、各種貧血などの診療をしています。多くの方は別の科からの紹介で受診されます。珍しい病気、原因のわからない病気、治りにくく長い間付き合っていく病気が多いこと、患者さんご自身にも協力をしていただいて治療を進めていく必要があるため、丁寧な説明を心がけ、日常生活や生活環境、希望を伺いながら診療するように心がけています。

なお、病気によっては移植治療が必要なため、移植ができる施設と密に連絡をとりつつ適切な時期に治療が行えるようにしています。

部長
椎尾（しいお）　康（やすし）

神 経 内 科

神経内科では、脳、脊髄、末梢神経、筋肉にわたる神経疾患、筋疾患を幅広く診療しています。脳卒中、てんかん、髄膜炎などの救急疾患のほか、高齢化に伴い増加しているパーキンソン病、進行性核上性麻痺、脊髄小脳変性症などの神経難病の患者さんを診療しています。症状としては、歩行障害、動作緩慢、ふるえ、筋力低下、しびれ、めまい、物忘れなどで受診される患者さんが多く、適切な診断と治療を心がけています。当科の特色として、末梢神経疾患、筋疾患の診断・治療に強く、他施設からの紹介患者さんも多く受け入れています。また神経難病の患者さんの入院診療に力を入れており、リハビリ部門と連携しつつ生活の質の改善をはかっています。

主任医長
濁川（にごりかわ）　博子（ひろこ）

感染症内科

感染症内科は、全身を見る診療科です。病院内のすべての科で感染症は起こり得ます。臓器別の診療経験や、ガイドラインなどを基本として、起因菌に関する情報や、感染症としてのガイドラインを組み込む形を理想としています。通常の感染症は悪性疾患と異なり、治癒することが多いのですが、治りにくい場合もあります。そういった時には過労などによる免疫力の低下を念頭に漢方薬なども併用してアプローチします。入院中の患者さんの治療へのコンサルテーションサービスと同時に外来患者さんの様々なご相談にも応じることができるよう努めてまいりたいと願っております。

部長
光井（みつい）　洋（ひろし）

消化器内科

消化器内科では、腹部の臓器を3種類（消化管・肝臓・胆道/膵臓）に分けて病気の診断・治療を行います。消化管では、食道・胃・小腸・大腸を、辛くないように工夫して内視鏡で検査します。早期がんが見つかれば、内視鏡での治療（粘膜下層剥離術：ESD）も積極的に行っています。肝臓では、ウイルス性肝炎・脂肪肝の治療や、肝腫瘍のラジオ波治療を行います。胆道/膵臓では、内視鏡で総胆管結石を取り除いたり、膵臓がんの化学療法を行ったりします。専門医が患者さん・ご家族とよく相談して、きめ細やかに対応いたします。どうぞ、お困りの事があれば、一度我々にご相談ください。

部長
深津（ふかつ）　徹（とおる）

循環器内科

循環器内科では、狭心症、心筋梗塞など虚血性心疾患、心房細動など不整脈、心臓弁膜症、心筋症など心疾患全般を扱っています。高齢化社会にともない、心疾患、心不全患者数が増加し、循環器内科の重要性がますます高まっています。虚血性心疾患に対するカテーテル治療、徐脈性不整脈に対するペースメーカなどの手術的治療と心不全コントロールなど内科的治療の両面で質の良い患者サービスを目指します。特に高齢患者さんでは他領域の疾患の合併も多く、総合病院の強みを生かして、他科との連携をスムーズに行っています。心臓外科治療など特殊治療が必要な患者さんについては提携している専門病院と連携して対応しています。

医長
髙野（たかの）　秀樹（ひでき）

腎 臓 内 科

当科では、急性期から慢性期まで、腎臓に関わる病気の診断治療を行います。腎臓病は自覚症状に乏しく検診異常で発見されることがあります。必要に応じて腎生検を含む精密検査によって診断し、輸液療法や血圧管理、免疫抑制療法や血液浄化療法による治療に加え、リハビリテーションによる生活の質の向上を目指します。腎臓機能低下状態では、薬物療法と食事療法を積極的に行い、適切な時期に血液透析、腹膜透析、腎移植の準備を進めます。慢性腎臓病（CKD）では全身性の合併症が多く他科との連携も必要です。他にもご病状、生活に配慮し、科学的根拠に基づく医療の実現を目指して参ります。

院長補佐兼部長
大石（おおいし）　展也（のぶや）

呼吸器内科

呼吸器内科では、肺癌、肺炎、間質性肺炎、慢性閉塞性肺疾患、気管支喘息など様々な“肺”の病気のほか、睡眠時無呼吸症候群といった“呼吸”の病気も扱っています。肺癌は、近年、治療法の進歩が目覚ましく、当科においても、従来からの抗癌剤・放射線療法に加え、分子標的療法や免疫チェックポイント阻害薬を用いた免疫治療など、最新の治療法の中から個々の患者さんに最適な方法を選択して治療を行っています。睡眠時無呼吸症候群は、外来での簡易検査や一泊入院での終夜睡眠ポリグラフ検査を行い、持続陽圧呼吸療法（CPAP）を外来で多数行っております。“肺”や“呼吸”の症状・病気でお困りのことがございましたら、お気軽に受診されてください。

医長
荒木（あらき）　一方（かずのり）

精　神　科

精神科は本来、いわゆる統合失調症や躁うつ病といった精神病の診療を行う診療科であり、古今東西どの精神科でもこれが根幹です。それに加えて当院当科は、その成り立ちが職域病院精神科ということもあり、発足以来、患者さんの職場復帰ということに特に力を入れてまいりました。その流れの一環といたしまして、平成27年からは、職場復帰支援のためのリワークセンターを開設しております。これも当面は、当科の大きな枝であり続けることでしょう。

なお、当科は病棟が閉鎖されてしまいましたため、外来のみの診療となります。患者さんの意思に反する強制的な診療は行いません。患者さん御本人の主体性を尊重した診療を、今後とも心がけてまいります。

部長
奥田（おくだ）　純一（じゅんいち）

外　　科

当科は、乳がん、甲状腺がん、食道がん・胃がん、大腸がん、肝臓や胆管・膵臓のがんをはじめ、虫垂炎、胆石症、体表のヘルニア、下肢静脈瘤を含めた血管の病気など、悪性の病気から良性の病気に至るまで幅広く手術で治す病気を対象としています。それぞれに専門分野のエキスパートの医師がおり院内関連各科とも連携が密で、迅速･丁寧に診断から治療まで 責任をもって担当させていただいています。当科のモットーである“救急難民を出さない医療、がん難民を出さない医療、誠意に満ちた医療”を実践しつつ、プロの職人として手術を中心とした治療を担当させていただいています。また近年急速に進歩しつつある腹腔鏡手術は、傷が単に小さいだけでなく、開腹手術では見づらい場所が大きく見えるなどの利点があり、当科でも各専門領域で積極的に取り入れています。

主任医長
緒方（おがた）　晴樹（はるき）

乳腺センター

「乳腺センター」は、乳がんを中心に良性疾患や男性の診察も行っています。乳がんの疑いがある患者さんは、初診の当日にマンモグラフィ、超音波検査を経て針生検まで行います。乳がん治療は、手術や放射線治療の局所療法と全身薬物療法の組合わせで進めます。針生検によって診断と同時にがんの性質（ホルモン感受性やHER2蛋白、増殖速度など）を調べ、最も効果的な治療法を選択します。全身療法を先行し効果を確認してから手術を行う術前療法を選択する場合もあります。また乳房切除術の場合、人工物（インプラント）や自家組織（筋肉や脂肪）による乳房再建手術も選択できます。最適な治療を形成外科・放射線治療医とともにチームを組んで進めます。また、抗がん剤治療は外来化学療法センターと情報を共有しながら治療が受けられるよう体制を整えています。

院長補佐兼部長
中原（なかはら）　和樹（かずき）

呼吸器外科

当科では、肺・縦隔の腫瘍性疾患（肺癌など）、気腫性肺疾患（自然気胸など）を中心に診断・治療を行っています。悪性腫瘍では手術だけでなく抗癌剤治療・放射線治療などを含めた集学的治療を行い、緩和治療も行っています。年間の手術件数は、最近5年間は年平均で約190例を行い、85％以上の症例を胸腔鏡で行っています。肺癌に対してはI期症例を中心に完全胸腔鏡下手術（最も大きなキズが5cm前後）を行っており、自然気胸の可能な症例に対しては、当科で考案した2cm位のキズ1か所だけで行う1port法を行っています。どの疾患についても、患者さん個々に最も適した治療法を検討して行っています。

部長
伊藤（いとう）　正一（しょういち）

脳神経外科

脳神経外科は、頭部・脳や脊椎・脊髄に関係する手術を主な目的とした診療科です。扱う病気は脳血管障害（くも膜下出血、脳出血、脳梗塞など）、脳腫瘍（良性・悪性）、脳や脊髄の生まれつきの異常などがあります。さまざまな頭のケガも脳神経外科で診療します。ただ、こういった病気であるかどうかは、初めから判るものではありません。特に、言葉の不自由、手足の動かしづらさ、歩きづらさ、目の見え方の異常、ひきつけの発作がありましたら、どうか早めに脳神経外科を受診してください。頭痛やめまいは脳の病気の症状とは限りませんが、CTやMRIを撮影して診断しますので、気軽に受診してください。紹介状や予約がなくても拝見いたします。

院長補佐兼部長
冲永（おきなが）　修二（しゅうじ）

整 形 外 科

整形外科は首から足の指まで、体のいろいろな部分の病気を扱います。当科では、整形外科の主な分野について経験ある医師が専門外来の形で診療を行っています。

1　四肢の関節の病気　当科は関節の内視鏡（関節鏡）を世界で最も早く始めた施設で、膝、肩、肘、手首、足首などに行っています。スポーツによるケガの他に、中高年の老化や関節リウマチの治療にも応用しています。
2　神経の病気　しびれや痛み、麻痺に対して、専門的な検査を行った上で、必要があれば顕微鏡を用いて神経を治す手術を行います。
3　手の病気　手の病気には、ケガから老化、生まれつきの異常までたくさんの種類があるため、手の専門医が担当します。
4　関節リウマチ　MRIや超音波検査でリウマチをできるだけ早く発見し、生物学的製剤の使用から人工関節置換手術など、一人一人の患者さんに合った治療を行います。
5　ロコモティブシンドローム　高齢になっても自分の力で生活が出来る様、運動療法の指導とともに骨粗鬆症などの薬による治療を併せて行います。

部長
奥田（おくだ）　純一（じゅんいち）

婦　人　科

婦人科診療は、秦前部長（がん治療認定医、婦人科腫瘍指導医、腫瘍専門医、日本産科婦人科学会専門医）が、平成30年3月31日で定年退職され、常勤医が不在となりましたが、秦医師が嘱託医として引き続き週3回診療して頂けることとなりました。そのため現在の診療の質を大幅に落とさずに継続できるものと思われます。子宮筋腫、卵巣嚢腫、性器脱等の良性疾患ではクリティカルパスが導入され、包括医療を行っております。悪性腫瘍は初期子宮頸がんや高度異形成上皮（前癌病変）には高周波電気メスを用いた子宮温存治療、初期子宮体がんは手術療法に加えホルモン療法による子宮温存治療、卵巣がんには手術から、術前、術後の化学療法に至るまで一環した治療を行っております。

部長
小野（おの）　正恵（まさえ）

小　児　科

急な熱、嘔吐、下痢、咳などは、予約なしでも当日受診できます。一般的感染症はもちろん、アレルギー疾患、低身長や川崎病、発達障害など幅広い内容に対応しています。食物アレルギーでは、食物制限を必要最小限にすべく経口負荷試験を積極的に行っています。起立性調節障害（立ちくらみや朝起きられないなど）やダウン症候群の方は年齢制限なく受診可能ですが予約が必要です。入院に親の付き添いは不要ですが、母乳栄養児やご希望がある場合は付き添い可能です。

心理相談、予防接種や育児相談をはじめ、子供の将来を考えた予防医療に力を入れるとともに、疾患の種類によらず、お子さんとその家族全体に配慮した診療を心がけています。

副院長兼部長
松元（まつもと）　俊（しゅん）

眼　　科

眼科は、4月から上田浩平医師と根本穂高医師が加わり、松元部長、善本主任医長、大島医師の計5名体制で診療を行っています。

当科では、コンタクトレンズ診療と屈折矯正手術は行っていませんが、それ以外の分野はほとんど行っており、なかでも手術治療に力を入れています。乱視矯正・多焦点（先進医療）などの高機能眼内レンズを用いた白内障手術や、新しく導入した網膜硝子体手術装置を用いた低侵襲硝子体手術を積極的に行っています。低侵襲の「目に優しい」手術は緑内障分野でも導入し、入院期間も短縮しました。

外来ではかかりつけ眼科医との連携を強化しており、病状が安定した患者さんは積極的に地元の眼科へお戻りいただいています。

副院長兼部長
江藤（えとう）　隆史（たかふみ）

皮　膚　科

「明るい皮膚科、楽しい皮膚科」をモットーとする皮膚科では、皮膚に関わる様々な悩みにスタッフ一丸となって誠意を込めて診療に当たってきております。形成外科の利根川先生チームとは綿密な連携を組み、皮膚腫瘍などの手術対応はきわめて迅速になされています。部長の江藤は、アトピー性皮膚炎と乾癬が専門で、患者会の顧問も務めており、患者目線での治療を目指して、従来の治療から最新の治療まで幅広く対応しております。最近10年でこれら疾患の新薬の臨床治験も20件以上実施してきました。名物「アトピー教室」は、薬剤師さんも参加してくださり内容が充実し、月に3回程度開催しております。光線療法・レーザー療法も充実しています。

主任医長
利根川（とねがわ）　守（まもる）

形 成 外 科

形成外科は身体表面の形や色の変化および機能を手術等で改善することにより生活の質を向上させ社会に適応させることを目的としている科です。例えば顔の傷などを気にして引きこもっている人を手術で傷を目立たなくさせて積極的な社会生活を送れるようにします。扱っている疾患としては皮膚良性腫瘍（ほくろ、粉瘤）をはじめとして悪性腫瘍およびそれに関連する再建、顔面骨骨折や軟部組織損傷、体表面の先天異常、瘢痕（キズ）やケロイド、その他（陥入爪、眼瞼下垂、腋臭症など）です。特に皮膚腫瘍（良性、悪性ともに）は皮膚科との綿密な連携のもと治療を行っています。何か心配なこと、気がかりなことがありましたらお気軽にご相談ください。

部長
鈴木（すずき）　基文（もとふみ）

泌 尿 器 科

当科では、泌尿器（対象臓器：副腎、腎臓、尿管、膀胱、前立腺、尿道、男性の外性器）に発生する悪性腫瘍や良性疾患（排尿障害、結石、感染症など）の診断と治療を行っています。手術では小切開による開腹手術のほか、腹腔鏡手術や尿路内視鏡手術を得意としています。また、がん化学療法、ホルモン治療、緩和医療などもシームレスに対応し、尿路結石や精巣捻転症などの救急疾患も応需しています。患者さんの多くは血尿、排尿障害、前立腺特異抗原（PSA）高値などの症状・所見を訴えて受診されております。当科には男性泌尿器科医師だけでなく女性泌尿器科医師もおりますので、性別・年齢を問わず、恥ずかしがらずお気軽にご相談ください。

部長
八木（やぎ）　昌人（まさと）

耳鼻咽喉科

耳鼻咽喉科は多彩な面を持っています。まず、良性発作性頭位めまい症に対する浮遊耳石置換法は1回の施行で約70％の改善が得られます。スギやダニアレルギーに対しては舌下免疫療法を行っています。突発性難聴、顔面神経麻痺については入院から外来治療まで重症度に応じた治療を行っています。手術治療に関しては、中耳炎に対する鼓室形成術や頭頸部腫瘍手術など頭頸部領域全般に対応が可能です。副鼻腔炎に対する鼻内内視鏡手術ではナビゲーションシステム、また耳下腺・甲状腺手術では神経モニタリングが導入され安全性の確保にも努めています。放射線科の協力を得て頭頸部癌に対する化学放射線治療も成果を上げています。

部長
大久保（おおくぼ）　敏之（としゆき）

放射線科

放射線科は診断部門と治療部門とからなります。診断部門では各診療科からのご紹介にもとづき、単純撮影、CT、3T（テスラ）の最新装置を含むMRI、超音波、血管造影、核医学（RI）等を用いて疾患の診断のための画像を提供しています。画像は診断専門医が読影（診断）しています。CTによる肺癌検診も行っています。治療部門では放射線治療の常勤医がCTを用いた治療計画装置および昨年度更新した最新照射装置（LINAC）で確実で効率の良い放射線治療を行っています。直接患者さんとお話をする機会は少ないですが、各診療科の先生方やコメディカルスタッフの方々と密接な連絡を取り、患者さんの利益が最大になるように丁寧かつ精確な診断、治療を心掛けております。

部長
鈴木（すずき）　丈夫（たけお）

ＩＶＲ科

IVR科では、画像診断技術を応用したインターベンショナルラジオロジー（IVR：画像下治療）と呼ばれる低侵襲性治療を多数行っています。具体的には、肝癌に対する肝動脈塞栓術や動脈硬化で細くなった血管を広げる血管拡張術、体内にできた膿瘍を切らずに体外へ出すドレナージ術など多岐に渡る手技を行っています。また、当科では超音波診断（肝臓、胆のう、膵臓、脾臓、腎臓などの腹部領域や乳腺、甲状腺、皮下腫瘤などの表在領域、さらには頸動脈などの血管領域）も行っています。

IVR、超音波診断ともに、学会認定の専門医の指導のもとで、当科の医師や技師は皆様に安心して受けていただけるように万全の体制で日々務めております。

医長
竹川（たけかわ）　徹（とおる）

リハビリテーション科

理学療法士11名、作業療法士5名、言語聴覚士2名体制で、適切にリハビリテーションを提供します。

入院では、院内他科の脳卒中、神経疾患、骨折、人工関節・靱帯損傷・各種疾患の術後、腫瘍・緩和ケア、慢性閉塞性肺疾患・呼吸器疾患の周術期、摂食・嚥下機能障害患者が中心です。高齢者・元々からの障害者が増加傾向にあり、早期からの離床を心がけるとともに、褥瘡対策、NST（栄養サポートチーム）、排尿ケアでチーム医療を実践しています。

外来では、上下肢痙縮（つっぱり）・かぎ爪様趾へのボツリヌス毒素治療、NESSシステム®による電気刺激療法、義肢・装具、失語症（全体構造法：JIST法）、書痙・ジストニアに対する専門治療を実施しています。

院長補佐兼部長
平石（ひらいし）　禎子（ていこ）

麻　酔　科

当院麻酔科のスタッフは6名の麻酔科標榜医からなり、うち2名は日本麻酔科学会認定の指導医、4名は認定医で、麻酔経験豊富なスタッフから構成されており、麻酔科開設当初より安心、安全な麻酔を心がけています。スタッフの中にペインクリニック学会認定の専門医資格を有する者が2名おり、種々の疾患に由来する痛みの治療に当たっています。また、東洋医学学会認定医も1名在籍しており、西洋医療に漢方医療を取り入れ様々な不定愁訴に対応しています。この他にもがん患者さんを対象とした緩和医療にも積極的に関わっています。平成17年からは緩和ケアチームを立ち上げ、院内の患者さんに対して緩和ケアを提供してきた実績や経験をもとに、平成25年度には緩和ケア病棟を立ち上げ、今では多くの院外からも患者さんも受け入れるようになっています。麻酔科は痛みをコントロールするという特技を生かして、色々な分野で患者さんに関わっています。

院長補佐兼部長
平石（ひらいし）　禎子（ていこ）

緩和ケア内科

がんと診断されたその日から精神的肉体的苦痛に対して提供される医療が緩和医療です。当院では難民を作らないというスローガンを元に、外来ではがん相談支援センターを通じて、一般病棟では緩和ケアチーム、根治的治療が終了してからは緩和ケア病棟にて緩和医療を行っています。当院の緩和ケア病棟では診療科主治医制（ツードクター制）をとっています。この制度は原発巣の臓器専門の主治医と緩和ケア医がともに診療に当たるシステムで、臓器専門性をいかしつつ緩和医療を行う事により、より質の高い緩和医療の提供を目指すものです。近年がん治療終了から亡くなるまでの期間はますます長期化の傾向にあります。緩和ケア病棟から退院され、新たに治療に挑戦したり、在宅に戻ったりと希望のある緩和病棟を目指しています。一人でも多くの患者さんが苦痛を取り除くことにより人間らしい有意義な時間を少しでも長く過ごされることを希望しています。

部長
柳谷（やなぎや）　謙一（けんいち）

歯科口腔外科

当科では虫歯、歯周病や義歯など一般歯科診療に加え、開業歯科では対応が困難な疾患を抱える方々には専門医と連携してリスクコントロールを図り、抜歯、小手術など観血処置を伴う治療を行っています。当院の救急医療分野で顎骨骨折、歯の脱臼や破折、軟組織の損傷など口腔顔面外傷や歯性の急性炎症に対しては、口腔外科の対応を行っています。

近年では、がんの手術・放射線・抗がん剤など一連の治療に併行して、口腔衛生や咀嚼、嚥下機能をサポートする「口腔ケア」がが治療に取り組む方々のQOLの維持向上に重要と認識されており、当院でがん治療を受ける多くの方々に口腔ケアを実施しています。さらに緩和ケア病棟においても誤嚥性肺炎防止を目的に口腔ケアに取り組んでいます。

こうした多様なニーズに円滑に対応するため外来では予約診療を行っています、ご理解ご協力をよろしくお願いします。

副センター長
宮澤（みやざわ）　健太郎（けんたろう）

救急総合診療科

救急総合診療科の主な仕事内容は、昼間に救急車で搬送されてくる方の治療です。軽症から重症の方まで多岐にわたる疾患を迅速に診療し、治療を開始します。待ったなしの状況も多く、常に神経を尖らせて診療にあたっています。また、地域の診療所より緊急性が高いと判断され、当院へご紹介頂いた方の救急診療も並行して行っております。　院内活動では外来や検査中に突然具合の悪くなった方がいた場合、応急処置を行う救急センター所属の機動部隊（RRST）を出動させます。その他、職員に対し胸骨圧迫心臓マッサージやAEDの使用方法などの訓練も実施しています。皆様が安心して院内で過ごしていただけるように努めてまいります。

部長
岸田（きしだ）　由起子（ゆきこ）

病理診断科

病理診断科では病に侵された臓器や細胞を顕微鏡で観察して診断しています。病理診断には主に①病理組織診断②細胞診③術中迅速診断④剖検診断があり、全身の臓器が対象となります。術中迅速診断は手術中に、腫瘍を切除する範囲やリンパ節切除を行うか等の判断するために行なわれます。生検、手術標本についてはより正確で速い診断を行うべく、臨床各科と情報を共有しています。病理解剖（剖検）は病院が提供する医療の質を検証し、診療の過程で生まれた様々な疑問に答えることによって医療の進歩に貢献しています。東京逓信病院では病理診断に関するご質問に病理専門医が直接お答えする「病理外来」も開設しています。

部長
関川（せきがわ）　憲一郎（けんいちろう）

内視鏡センター

内視鏡センターでは、上部消化管（食道、胃、十二指腸）や下部消化管（大腸）の内視鏡検査・治療を消化器内科、外科、人間ドックの医師が担当し、日々安全・正確で苦痛のない診療を目指して努力しております。検査の苦痛がご心配な方には鎮静剤注射を用いた検査も安全に監視しながら実施可能で、これまで受けられた多くの方からもご好評です。早期がんの内視鏡治療や、胆管結石の診断・治療内視鏡（ERCP）などは入院下で、複数の医師と看護師からなるチームでベストな診療を提供いたします。センター内は明るく比較的広いスペースが確保されており、音楽の流れるリラックスできる環境となっております。皆様のご利用をお待ちしております。

部長
古畑（ふるはた）　総一郎（そういちろう）

人間ドックセンター

人間ドックは専用の施設にて男性専用日（月、火、木、金と第1、第2土曜）、女性専用日（水と第3、第4土曜）に「日帰りドック」を実施しています。

1日の流れとしましては朝8時～9時頃来院していただき、概ね午前中に検査は終了し、午後1時から始まる医師面談の際に約100にわたる検査項目中7～8割の結果を「当日分の成績書」として作成しお渡ししています。医師との面談を受けずにお帰りになることも可能ですが、アドバイスを生活に活かしていただくことで病気になりにくくすることができますし、異常所見に対する精密検査や外来予約の手間が省けますので、年に1度くらいの機会ですから面談もお受けいただくことをお勧めします。

院長補佐兼部長
大石（おおいし）　展也（のぶや）

臨床検査科

現在、臨床検査技師39名、看護師（外来採血）5名、医師2名（非常勤、兼務を含む）で院内の臨床検査を一手に担っています。大別して、血液、尿などを扱う検体検査と、心電図や呼吸機能をみる生理機能検査があります。検体検査は、一般（尿、便など）、血算、生化学、免疫化学、細菌培養の5部署に分かれ、輸血部機能も有します。生理機能検査は、他に心エコー、頚動脈エコー、脳波、聴力などがあり、人間ドックの腹部エコーも分担しています。外来採血室には、当科の看護師の他、技師全員も交代で参加しています。また日直・当直体制をとり緊急性のある検査や輸血検査にも24時間体制で臨んでおり、チーム医療の一員として病院の機能を支えています。

室長
勝田（かつた）　秀紀（ひでのり）

栄養管理室

栄養管理室は、様々な疾患を有する患者さんを栄養面からサポートしています。

栄養指導に関しては、個人指導のほか、教育入院対象者の糖尿病教室を定期的に開催しています。また、個人・集団指導のフォローとして、20分程度で気軽に受講できる外来栄養相談を常設しています。

入院中のお食事では、疾病別の食事のほか、季節に応じた行事食、常食の方を対象にした選択メニューや月1回のお弁当献立をご用意しています。食欲低下がある場合はベッドサイドへ伺い食事調整を行います。

また、栄養サポートチーム（NST）、褥瘡対策チーム、緩和ケアチーム等でのカンファレンスや回診において、栄養面からの提言を行うなど、チーム医療へも積極的に参画しています。

部長
並木（なみき）　路広（みちひろ）

薬　剤　部

チーム医療が推進される中で、薬剤師の役割も変化してきています。従来からある処方箋に基づく調剤を基盤としつつ、注射薬の混合やがん化学療法の管理も行っています。病棟には薬剤師が常駐し、患者さんに薬の説明を行い、効果や副作用をモニタリングするなど、医師・看護師等と協働しています。感染防止対策、褥瘡対策、緩和ケア、栄養サポートの各チームの一員でもあります。外来患者さんには、院外処方箋の内容を確認してお渡ししています。院外処方箋の調剤は薬歴を一元管理するために、「かかりつけ薬局」「かかりつけ薬剤師」をご利用下さい。薬剤師は、「薬」をとおして患者さんの安全で効果的な治療に関わっています。

部長
鮎川（あゆかわ）　みゆき

看　護　部

医療を取り巻く社会情勢では、病院・施設から地域・在宅へという流れを進めることが明確化されています。当院看護部は「心がかよい信頼される看護を提供します」という理念を基に、時代の変化に柔軟に対応し、専門職として役割を発揮できる看護師を目指しています。患者さんを中心に多くの職種が協力し合い、質の良い医療・看護サービスが提供できるようチーム医療の推進にも力を入れています。

これからも、患者さんに選んでいただける病院であるよう努力を重ねてまいりますので、どうぞよろしくお願いいたします。